

はなむけの言葉



総長・学長

ながい かずゆき
永井 和之

卒業生諸君の卒業を心から祝福します。

諸君の卒業する中央大学は、今、新たな新世紀を力強く歩み出しています。そして、母校中央大学の新たな発展は卒業する君たちの今後を強く支援することとなると確信しています。その改革は、この豊かな地球を次の世代に引き継いでいくという歩みでもあります。次の世代に、この地球をより美しく、平和で文化的なものとしていかに引き継ぐかということは、全ての人類共通の課題でもあります。

卒業生諸君も、全中央大学人の一

員として、このことを明確に意識して、社会人として活動をして欲しいと考えています。

この地球の美しさは、自然環境的な美しさはもちろん、文化的な美しさをも意味しています。文化的な美しさは、平和であり、人間の知的な探求心に応えるべき哲学から科学までの人類の叡智であり、また、人間精神を豊かにする音楽・美術などの芸術であろうと思います。

卒業生諸君は、具体的には、古代から現在までの人類の叡智を結集させる学問の府である中央大学において、人類の叡智を学んできたことと確信しています。そして、その叡智を、

これからは社会に還元していくことを求められています。そして、先程述べたような美しい地球を将来の人類に継承していく責務を負っているという自覚を持つていくことが求められています。そのような姿勢を維持し、社会という場において、おかしいことはおかしいと感じる感性を堅持し、誠実に人生を送って欲しいと願っています。

中央大学は、派手なところはありませんが、むしろ地味な大学という印象を持たれています。そのような社会からの印象を否定しません。しかし、その派手ではないという印象には、本学の卒業生が誠実であるということが含まれているように思われます。これはまさに、本学の伝統である質実剛健ということではないかと考えます。ということでは、私はこの伝統を誇りに思います。卒業生諸君にも、この本学の伝統をふまえ、人生のこの王道を倦むことなく進んでいくことを希望します。

そして、君たちの母校となる中央大学は、いつまでも君たちとともにいます。君たちが人生において挫折そうになどき、この人生の王道を歩むことに疲れたとき、本学に入学し、学んだ日々を思い出してください。そして、そのような日に中央大学は君たちに勇気を与えられる大学として、厳然としてそびえ立つ大学であり続けます。

また、諸君がその社会経験から得た叡智を、母校中央大学の新しい伝統を築いていくうえにおいて供してくることを願っています。それでこそ母校中央大学が、全中央大学人のものとなり、より一層存在感のある大学となることと考えるのです。私自身も、母校である大学に教員として残った者の責任として、母校の伝統を守り、発展させ、そして、新しい世紀に敢然として輝く新しい姿の母校を目指して、できる限りの努力をすることを卒業生諸君に約束します。また、会いましょう。

卒業の日に

洞察力とこだわり



法学部長

かない たかじ
金井 貴嗣

卒業生の皆さん、卒業おめでとう
ございます。

皆さん、卒業を機に、自分の人生を振り返ってみるとともに、これからの自分の人生を考えてみませんか。これまで、楽しいこともあれば、つらい思いをしたこともあったことと思います。大学に入ってみると、中学・高校とちがって、自由な時間がたくさんあることに、とまどいながらも、自分を見つめる時間ができ、これから何がしたいか、何ができるか、を考えるようになった。しかし、いざ、考えてみると、今、日本の社会や日本を取り巻く国際社会が変わりつつあることに気がついて、自分が、いかに世の中のことについて知らなかったかを自覚させられたことと思います。それでも、いつまでも親のすねをかじるわけにいかないか

ら、生活の糧となる仕事につかなければと思いつながら、さりとて、何でもいいわけではなく、「生きがい」を感じられる仕事を、と思いつ悩んだに違いありません。

これから社会に出て、仕事をしてみると、「稼ぐ」ということがいかんたいへんなことか、実感することでしょう。また、世の中、いい人ばかりとは限りません。これから、いくつも壁にぶち当たります。それらの壁を突き破ることができるとかどうかは、皆さんの、社会を洞察する力と、何を大切に生きてゆきたいかの「こだわり」の強さだと思います。これからの洞察力と「こだわり」は、皆さんが、大学を卒業してから、生涯、行うであろう「学」「問」によって養われ強くなってゆきます。日々、自分を高める努力を継続して下さい。

学びの連続



経済学部長

まつまる かずお
松丸 和夫

ご卒業おめでとうございます。経済学部として総合大学としての中央大学は、昨年創立百周年を迎え新たな第二世紀への歩みを開始しました。その記念すべき年にご卒業されるみなさんとひとしおの喜びを分かち合いたいと思います。

今日、新たな門出をされるみなさんに考えていただきたいことが二つあります。一つは、自分は大学で何を身につけたのか。二つめは、これから自分は何をしていくのかということです。

大学を卒業するということは、本人のみならず、ご父母やご親族にとっても喜びです。しかし同時に、社会には大学を卒業しない働き、生活している人々が多数います。大学の「大衆化」が進み、今日では大学卒業の学士号それ自体希少価値の小さいものとなりました。しかし、4年間の大学生活で何も身につけな

かったとしたらそこに何の意味がありません。私は、大学卒業生に求められる資質の一つとして、自己分析を客観的におこない、環境の変化をきちんと認識できる知的能力が大切だと考えます。そして周囲に流されるのではなく、流れを作り出す能力を養ってほしいのです。

大学の外の社会では、みなさんの想像を超える厳しい試練が待ち受けています。しかし、どんなに困難なときでも冷静に事態を分析し、最も合理的な選択ができるためには、ねばり強さが必要です。

さて、このようにいわれて「不安」を感じる人がいたら、それは正常な感性の持ち主であることの証です。大学では身につけ得なかったことを負の財産と考えずに、「だからやるべきことがたくさんある」と前向きに取り組んでいただきたいと思います。人の一生は、学びの連続です。どうか活躍下さい。

学び・教養・品格



商学部長
酒井正三郎

学窓を巣立つ卒業生のみなさん、ご卒業おめでとうございます。私はみなさんに、学び・教養・品格という三つの言葉を送りたいと思います。

このところ、いわゆるビジネス・エリートというべき社会人による「犯罪」がマスコミを騒がせています。「粉飾決算」「耐震偽装」「偽計取引」といった言葉を新聞で目にしない日はありません。たしかに、一部の人間による問題行為はいつの時代にもありました。しかし、最近の事件は社会自体の構造変化を背景にして起きているように思います。

前世「紀末の冷戦構造の崩壊以来、体制的緊張感を欠いたグローバルバリゼーションの進展や市場原理主義の強まりとともに、日本の社会においてもさまざまな分野に大きな変化の波が押し寄せてきています。実力主義や成果主義といわれるとおり、世の中の価値観の多くが、結果がすべ

てという方向に大きくカジを切ってきています。いわば個人の嗜好を超えた力が、外から個人に向かつて懸かってくる時代、それが今という時代の特徴です。

かかる時代を生きる上で大切なこと、それはその人の行動基準の中にものごとの善悪を判断する力が身に付いてつねにある、ということです。これはハウツーを主体にした知識によって育まれるものではありません。むしろこれは、学びつづける意志によって教養を磨き、それを豊かにする努力をつうじて得られるもの、状況を解釈し、それへの自己のかわりについて客観的な意味づけを行う訓練によって身に付く力です。換言すれば、自己を相対化したり、自己を律したりする力が必要とされていく、ということです。そして自己規律があつてはじめて、その人に人間としての品格が備わってくるもの、あるように思います。

みなさんの前途が洋々たるもの、ありますよう祈念しています。

「知的」体力に自信あり



理工学部長
田口 東

ご卒業おめでとうございます。皆さんは理工学部、理工学研究科において何を得たでしょうか？第一は、専門分野の知識でしょう。科学技術の進歩は早いです、それが古くなつてしまうことがあります。しかし、どのように勉強すれば必要な知識が得られるのかという方法論には賞味期限はありませんし、どのような場面でも有効に使えらると思います。

第二に、卒業論文、修士論文としてまとめた成果です。内容そのものはお蔵入りの運命にあるかもしれませんが、しかし、それをまとめ上げるプロセスで得られたものがあります。最初は、ほとんど手探りの状況の中で、問題らしきものを見つけたら、調べる、他の研究者の取り組みを調べながら、自分で答えを知ることが出来る問題の形に作り、自ら考えた方法を試しながら、成果にたどり

着いたと思います。その途中には、ねばり強い試行錯誤の繰り返しと、大変に嬉しい成功があつたと思います。研究室での議論やアドバイス、外の研究発表会における交流の中で研究を進めてきたことは、貴重な体験に違いありません。このような自主的な研究体験は、ここでしか得られない貴重な財産でありますし、それを経験しなかつた人に対する大きな優位点となるでしょう。

このように理工学に基礎を置く、知的な体力が身についたということ、大きな自信を持つていただきたいと思います。そして、この知的体力は、研究分野が異なってももちろん通用する訳ですから、新しい問題、新しい分野に果敢に挑戦して、新しい技術、分野を開拓されることを大いに期待しています。

卒業の日に

矜持ある人生を



文学部長
宇野 茂彦

ご卒業おめでとうございます。

皆さんはこの自然に恵まれたキャンパスを巣立って、いよいよ実社会に羽ばたいていこうとされています。大学での勉強は必ずしも実社会ですぐに役立つような知識や技能ではないですし、そもそも人は学校だけでできあがるものでもなし、社会に出るから自己研鑽は必要なことです。「君子は器ならず」といいます。

一方の用途にだけしか役に立たないのは本当の人間ではありません、それは単なる器械でしょう。技術や知識は必ず古びるものであって、それを常に新たにしていくなかで、人の知恵というもの。そのような根本的な思考の基礎を皆さんは身に付けただと思えます。

実社会では時として思うようにい

かない事態に遭遇します。その際、決してくじけることなく培った知

力で乗り越えていって頂きたい。そのためには、まずは矜持をもつことが大事かと思えます。物事はたいがい内部から崩れるのです。韓非子は国家は五蠹によって崩れる、すなわち白蟻のような内側から蝕む存在によつて国家さえも崩壊すると言いますが、個人も同じことで、矜持を失って自暴自棄になることが尤も忌むべきことです。

孟子は「仰いで天に愧ぢず、俯して人に忤ぢざるは、君子の樂しみ」と言っています。これは自信がゆるがない最良の方策です。本当にそのような生活を送ることができたら、どんなにか幸せでしょう。そのような未来を目指して矜持ある人生を送って頂きたいと願います。

21世紀を築くとは



総合政策学部長

おおはし まさかず
大橋 正和

20世紀とはどのような時代であったのでしょうか？総合政策学部が、設立された1993年当時がどのような時代であったのかと振り返ってみると、1989年にベルリンの壁が崩壊し1991年にソ連がロシアになるといふ20世紀を生きてきた人間にとつては驚くようなことが次々に起こっていました。1990年代を振り返ってみると、グローバルゼーションの進行、就業人口の第3次産業へのシフト、インターネット、携帯電話等の情報通信技術の飛躍的進歩、豊かさの概念の変容、個の論理の推進等20世紀の社会では考えられないような社会の変容が起こりました。

そのような状況の中で、産業革命以来の近代工業化社会の完成を目指した20世紀を総括し21世紀の新しい社会システムを築くのかということ、は卒業される諸君がこれから社会の中で直面する諸問題を解決しながら考え新しい社会を築いて行かなくてはならない大きな課題であると思えます。

「賢者は歴史に学び、愚者は体験に従う」というドイツの宰相ビスマルクの有名な言葉があります。体験は、「百聞は一見に如かず」ということわざのように重要な行為であります。大学から世の中に旅立つ卒業生諸君は、社会の中でこれから様々な体験をします。この言葉の意味は、賢者は、自分の体験や考えばかりで物事を理解するのではなくその原因や背景や世の中の変容などを考えて自分の経験や体験を普遍化することにより共通の原理や法則を見つけて出す事だと言うことです。それが、歴史に学ぶという意味です。21世紀の新しい社会のシステムを築いていく諸君には、この精神を忘れずに社会で活躍されんことを祈念します。